

研究余暇ノート

船 木 満 洲 夫

昭和40年（1965年）9月、東京の西武百貨店で「小泉八雲展」（日本経済新聞主催）が開かれた。その案内用冊子の巻頭に、矢野峰人が「小泉八雲について」と題する一文を寄せている。矢野峰人は昭和36年に、『日本英文学の学統——逍遙・八雲・敏・禿木——』を研究社から刊行している。

矢野峰人の巻頭文は、「われわれは、小泉八雲に対し、少くとも二つの点に於て負ふ所極めて大である。その第1は、海外への日本紹介者としてであり、第2は、文学の教師としてである。そして、この二つの面に於て、彼の位置をユニークなものたらしめたのは、彼が文字通りの世界人・国際人であった事である」と始まり、八雲の出所を略述したあと、「このやうな血統や閥歴が、自ら彼をして、ジャーナリストとしても文学の教師としても、人種民族的差別を超越して、一切を広い視野・高い見地から、観察・評価せしめる基礎となったのではあるまいか。更にまた、彼が創作家であった事が、これを強化するに与って力あった事も否定できない」と説明する。八雲がある意味でユートピアンであり、日本紹介者、ジャーナリスト、文学の教師、創作家として、「広い視野・高い見地」に立っていたことは、大方の者の認めるところであろう。

「八雲は日本を買ひかぶってゐたとか、あまりにロマンティックな面を見る事に偏してゐたとかいふのが、在来一般邦人の口にする所であった。八雲がロマンティシズムを尊重し、さうした精神を表現するものに同情を、寄せてゐたのは、彼の文学観から来てゐるので、彼自ら、告白してゐる通りである」、「彼の前後を通じ、日本の風土・民族性・芸術等広きに亘り、彼程深い愛と理解とを以て、これを海外に紹介した人があるであらうか」と強調する。八雲にも非難されるほど偏した面のあったことも事実であろうが、「深い愛と理解」を保

持していた点は貴重な指摘と言うべきであろう。矢野峰人は例証を挙げる。

「極東の第一日」と題する随筆については、「周到精緻な観察と深い理解とに満ちてゐる」と、そして数年後の「停車場にて」と題する短篇に関してはこう結論づけている——「凶悪犯人と頑是ない嬰兒とを対照させ、これに配するに、国法の厳守者たる一人の警官と好奇心のみに駆られて集る群衆とを以てしてゐるが、其処には、一切をば、人間性の深処からにじみ出る涙を以て包む人生の『哀音悲調』が見事に奏でられてゐる。一切の現象の奥に美を見ようとする精神——これを、もし、厳密な意味に於ける『ロマンティック』精神と呼ぶならば、八雲はまさしくその代表者の一人と言ってよからう」と。これらの評言において、八雲の観察、理解や美を見る精神につき、矢野峰人が早くも的確に述べ、ロマンティズム批判を逆に肯定的に捉える論法など、八雲が論者に移っていると思える。

東大における講義集に関しては、「彼の講義集程、文学入門書としてのみならず、作品を如何に読み、かつその味を如何に伝達すべきか、この至難な方法を、懇切丁寧に解説した書物の他に有る事は私は知らない」と、聴講した学生ノートについて述べ、ジョン・アースキンの賛辞を引いている。誇張の過ぎる賞賛のようで、必ずしもそうではないのではなからうか。そして「ややもすれば無味乾燥に流れ易い文学の講義に彼が成功したのは、彼が『文学をば情緒と情操との表現——人生の再現として教へ』これを『学生の想像力と情緒とに訴へるやうに努めた』からである」と、八雲の中核をなす主張を指摘する。自ら学問を究めた者にしてなし得る筆の運びにちがいない。

（追記）矢野峰人は筆者の直接の恩師であり、「矢野峰人先生」としたいところを、一般性を考慮してそれを略した。河原町通りの古書店で、たまたま私は上記「小泉八雲展」に関する薄い冊子を800円で購入した。得難い文章だと思う。